

シェルドンと神 修正版

2680 地区 PDG 田中 毅

私は、1970 年、芦屋ロータリークラブ入会し、1972 年度幹事に指名されました。

1971 年副幹事の時、当該年度ガバナー安福氏より、関西ロータリー研究会への参加を勧められて、入会しました。第一回のセミナーが、神戸市御影で開催され、その時の講師が××氏で、議題は、「ロータリー発生史」でした。

その後、関西ロータリー研究会が分裂して、その分派が千種会となりました。

千種会のセミナーには、初期の頃には、ほとんど毎回参加し、その後、××、××、××氏が入会しました。初期の 2~3 年間は、「ロータリー発生史」が小分けにして毎回語られました。誰かが、講義の内容をまとめて出版しましたが、すぐ取りやめになりました、2670 地区の会員が、録音をして配布しましたが、それも禁止になりました。その理由は後日分かりました。

1996 年、ガバナーに就任。シェルドンのことを詳しく知りたくて、RI 本部で尋ねたところ、Golden Strand の存在を教えられ、全文のコピーを入手しました。1997 年から 1 年掛かって翻訳を完了したところ、不可解なことが分かりました。Golden Strand の内容が千種会に於ける××氏の講演内容と全く同じことが判明したのです。即ち、××氏は Golden Strand を参考文献として引用したとは断らずに、そっくりそのまま何年間も、その内容を講義していたことが判明したのです。特にロータリー発生史は、一字一句、Golden Strand の記述がそのまま、語られています。従ってその出典が解ることを極めて警戒して、録音や出版を禁止したものだと思われまます。

Golden Strand を書いた Oren Arnold(1900~1980)はシェルドンより 38 歳若く、シェルドンが実質的にロータリーから離脱した 1921 年には、会員ではなかったこと、シカゴクラブの有志による Golden Strand を書くための資料収集が始まったのが 1959 年からであること、資料収集に携わった 5 名の会員の最古参の John B. Hayford 委員長がシカゴクラブに入会したのが 1922 年であることから、この執筆者の中には、直接シェルドンと接触した人は全くいないことが分かります。Golden Strand の内容は、1934 年に、シカゴ大学社会科学調査委員会が発行した「ROTARY?」の内容をそのまま借用し、それに 1959 年以降、伝聞によって集めたエピソードを加えて創作したものであることが想像されます。

Golden Strand は 1966 年に出版された、あるシカゴクラブの会員を主人公にした、小説風の文献であり、事実とは異なるフィクションが面白おかしく描かれています。そのために多くのくの間違ひがありますが、千種会の講義では、その間違ひをそのまま教えられていたわけです。一例を挙げると、フランク・コリンズが弁護士であると書かれていますが、実際は果実卸売業です。Service above self を発案したのはシェルドンと書かれていますが、これも間違ひです。

私が、それとなく、××氏にその件に触れると、非常に高圧的な態度で、「私の講義内容は、すべてシェルドンの原文を翻訳したものだ。」と言い切りましたが、それが嘘であることは、後日、私がシェルドンの文献のすべてを収集した過程で、判明しました。

1998 年 4 月に、私が Golden Strand の翻訳を出版しようとした際には、××、××両氏より、強く反対されました。その理由は著作権侵害になるというものでしたが、本当のところは、××氏の講演のネタ本が解ることであることは明白でした。

間違ひだらけの二次文献である Golden Strand を語るだけで、シェルドンのすべてを研究したかのよう語り、Sheldon Society を名乗って、そのエンブレムまで作る不遜な態度に、強い憤りすら感じました。

私はそれを機会に、千種会を退会して、敢えて、Golden Strand の翻訳の出版を強行しました。

ちょうどその頃、神崎 PDG が 1921 年の年次大会でシェルドンが講演した「Rotary Philosophy」を発見して、これを XX 氏が翻訳して、それを機会に千種会の講義の内容はこの文献の内容に一変しました。これが XX 氏がシェルドンの文献に出会ってそれを翻訳した、最初で最後の機会でした。

この Rotary Philosophy は、後日ロータリーに大きな問題を提起したスピーチでした。

今までに、かなりの数のロータリアンの文献を翻訳しましたが、ほとんどの人は神について触れており、私生活を含めたあらゆる場面で神の加護を願ったり、神の意志に従ったり、神を祝福する文章が出てまいります。ポール・ハリス然り、チェス・ペリー然り、ウイル・メーニヤ Jr 然り、更に歴代のアメリカ大統領然りです。

これに比べてシェルドンのスピーチの中からは、ほとんど、神という言葉は見当たりません。1910 年、1911 年のスピーチ中からは、「神」は一切見当たりませんが、1918 のスピーチの中で「もし科学を超えたものならば、それを自然の法則と呼んでください。もし宗教ならば、神の摂理と呼んで、判りやすく述べる方が良いかもしれません。」と、用語として「神」が出てまいります。

1921 年の The Rotarian の原稿とエジンバラのスピーチでは、「世界の様々な宗教によって、ほとんど普遍的に述べられている、神である全知 Omniscience、全能 Omnipotence、普遍的存在 Omnipresence の三位一体を示すものです。」という表現と「もしもあなたが神ということばを好まないのなら、創造主・provider という言葉を使ってください。という記述で「God」という単語が出てきます。

シェルドン・スクールの膨大な教科書も、コンピューターの検索機能を使って、くまなく検索しましたが、「God」という単語は全く見つかりませんでした。シェルドンは徹底的に神を排除して、純粋な経営学上の理論でサービス理念を解いているのです。

初期のロータリーは WASP (White Anglo-Saxon Protestant を中心に作られましたから、大部分は敬虔なプロテスタント教徒で構成されていたと思われます。

更にイギリスのロータリー群は、アメリカの運動とは別に独自に作られ、独自の自治権を持ったまま、後日、RI に合流したという経緯があります。当時のイギリスでは職業は世襲が原則であり、高度の倫理性を持った天職という職業観でしたから、シェルドンの経営学に基づいた学問的な職業観とは全く相容れず、終始 He profits most who serves best の廃止を要求し続けた経緯があります。

シェルドンの思考はまさに修正資本主義を先行したものであり、シェルドンが輝いた 1913 年から 1921 年は、後日修正資本主義を採用する民主党政権 (ウッドロウ・ウイルソン大統領) でしたから、思い切り活動できる環境にあったと思われます。Sheldon も George Pigham も Jhon Knatson もドイツ系ですから。Protestant とは一線を画した数少ない民主党よりのロータリアンだったのかも知れません。

さて、1921 年政権交代で大統領が共和党のウォーレン・ハーディングに代わりました。ロータリアンの大部分は、伝統的に共和党の応援者であり、民主党的なシェルドンの経営学理念に同調するロータリアンは少数派になりました。そんな四面楚歌の中で、職業を天職だと信じ、シェルドンの経営学理念を真っ向から否定するイギリスでスピーチをすることになったのです。

シェルドンを失脚させようという、社会奉仕派の陰謀だったのかも知れませんが、シェルドンはスピーチを断るべきだったのかも知れません。

私の考えでは、シェルドンはこの際、思いのたけを語って、これを最後にロータリー運動から決別して、シェルドン・スクールの運営に全力を傾注する覚悟ではなかったのかと思います。

案の定、45 分の予定を 1 時間以上に延長して、彼の理論のすべてを語り尽くしました。場所がイギリスなので、「神」という言葉も少し入れました。

最後に、「結論」を述べて、それで終わるべきところ、さらに、「ナイアガラ」という皮肉たっぷりな

おまけをつけています。その出だしは、「人間の意識の中で、物理的な分野において最強のナイアガラより強い「光」と「力」を持った、最も優れた発電機にならなければなりません。全世界のロータリークラブに対して、法則に関するささやかな教訓と人生との関連に関する内容の、私の好きな無韻文の作品を捧げる名誉を与えてください。」という文章で始まっています。

これは、ナイアガラを当時のロータリーに例えて、その力よりも、彼が主張する経営学に基づくサービス理念の方が正しいことを示唆する文章です。

そして、この文中で、今までも、これからも使わない、「神」という単語を 12 回も乱発しているので、これだけ「神」を使ったら、「神」が大好きなイギリス人もさぞ満足したことでしょう・・・私は、シェルドンの精いっぱい皮肉だと、受け止めています。そして、シェルドンはこれを最後にロータリーとは、完全に手を切って、その後 1930 年までは、籍だけはおいていますが、ロータリーとの関りは持っていません

ウェブ上で発見した、シカゴクラブの膨大なアーカイブスをくまなく調べましたが、1921 年以降は、シェルドンの名前は一切出てきません。委員会構成表からも外されています。シカゴクラブや RI としても、シェルドンの名前抹消という、はっきりとした対抗措置を取ったものと考えられます。

日頃とは異なる God の連発のスピーチに対して、イギリスのデビッド・ニコルはその真意を悟ってか、1984 年に出版された「Golden Wheel」の中で、わざと「セールスマンの死」というタイトルをもち、シェルドンを強く非難しています。更に、「セールスマンは二度死ぬ」というサブ・タイトルをつけて、「シェルドンというセールスマンは 1935 年に死んだが、それ以前のエンジンバラの大会で既にこの世を去っている。」と書いています。なお、シェルドンのスピーチが終わった際に送られた盛大な拍手は、感銘を受けたからではなく、くだらない長い演説がやっと終わったという安どの拍手であったとも書かれています。

シェルドンはこのエンジンバラでの逆襲以外には、経営学に基づくサービス理念を説くにあたって「神」という言葉を一切使わなかったというのが、ライフワークとして、長年シェルドンを研究してきた私の分析結果です。

なお私的な著作として、1929 年に書かれた、「奉仕の原則と保全の法則」の中では「私は現生でどれくらい上手に義務を果たしてでしょうか。創造主、神、すべてをもたらす宇宙の源流、私の仲間たちへの義務です。上手にそれを果たしてでしょうか。そうだとすれば、私は地獄に落ちる心配をする必要はないと思います。私はこの世とあの世の双方における、地獄と天国を信じます。私たちは天国を作りますし、地獄も作ります。それらはすべての人間に共通な精神と心の状態に過ぎません。」と死後の世界のことを書かれて、創造主、神という言葉が並行して使われています。

善行を積めば死後は極楽へ、悪行を重ねれば地獄に堕ちるとするのは、仏教の思想です。シェルドンも自らインドのバカバンドスの影響を受けたと述べていますから、東洋的思考を強く受けていたのかも知れません。

この年に 30 歳という若さでこの世を去った息子を悼む心からか、彼自身の体調についてかなり不安があったからか、何れの理由かは分かりませんが、厭世感の漂う文章であることには間違いありません。この本を執筆した翌年、彼は正式にロータリーを去り、その 5 年後、67 歳の若さでこの世を去っています。

××氏がシェルドンの文献を翻訳したのは、Rotary Philosophy 一冊のみであり、1910 年、1911 年、1918 年のスピーチの内容も全く知らず、ましてや、シェルドン・スクールの数多くの教科書については、その存在すら知らないことが、同氏と直接議論した過程で解りました。

少しでも千種会の講演内容が正しくなるようにと思って、始めの頃は、シェルドンの新しい文献を発

見する毎に、そのコピーを送ってあげましたが、何の反応もないので、馬鹿らしくなって止めました。

ロータリーを学ぼうという機会を与えてくれたのが千種会のあることは間違いなく、非常に感謝しています。しかし、シェルドンの文献は、多くの問題をはらんだ Rotary Philosophy を一冊翻訳しただけで、後は、Golden Strand という小説がいの文献からの引用で、シェルドンを語り、Sheldon Society を名乗り、かつ、そのエンブレムまで作るという不遜な態度に反発して、フランク・デブリン会長、ドクターマン会長の後援を頂いて、シェルドンの一次文献を集めて、シェルドンを真面目に理解する組織として「源流の会」を創立したのが真相です。世界親睦委員会 RRVF に「源流の会」として、RI に正式に申請したのですが、類似組織「歴史と伝統の会」があるという理由で却下されました。

現在の図書購入は、「源流の会」が行っていますが。開設当時は、RI が書庫の重複文献を整理していることを聞き、The Rotarian 100 年分 1200 冊、国際大会年次報告書 100 年分を、更に、アメリカの古本屋のウェブサイトを通じて、シェルドン・スクールの教科書 100 冊を、全て私費で購入して、「源流の会」に寄贈したものです。

現在は 35000 件のアイテムを集め、今や日本最大のデジタル図書館にまで発展しました。

なお「源流の会」の設立に関わった初期の会員は、私と同じ思いで、千種会を退会した会員が多かったことから、千種会の名前を口にする人はおらず、シェルドンの理念は、宗教色を排した、純粋な経営学に基づいたサービス理念だというのが、「源流の会」の統一見解です。